

い。それは如何なる理由によるのかこの書に地圖が附してない事についてである。この文庫の性質からも、又適當な地圖が現在入手し難い事情からしても、錦上華をそへる意味でパレスチナ方面の鮮明なる地圖の一枚は是非挿入していただきたいかつたと望むのは望蜀に過ぎるであらうか。(弘文堂發行、教養文庫、定價五拾錢)(會田雄次)

續日本地政學宣言

小牧 實著

本書は先般、講談社より出版された「日本地政學」の姉妹篇である。前著と同様に、既作論考二十一篇の集成ではあるが、大部分は大東亞戰爭勃發以後七ヶ月間の執筆にかかると。彼我を併せ算へる時、兩著のみにても今次戰爭勃發以後僅か數ヶ月間の執筆論考實に約三十篇、私は先づ短日月にかくも多數の論說を諸新聞、諸雜誌よりの依頼のままにもせられた博士の誠意と精力とに頭の下るを覚える。而も著者は「顧みて元來頑健ならざる私がよくもここまで健康を保持し得て來たものであると若干の感慨なきを得ない。」とその序文に記してをられるのである。

今や日本は着々と帝國の理想、使命を實現しつつある。輝かしくも偉大なあの十二月八日以来日本人の歩調は揃つた。歐米依存主義者、崇拜者も驕然自己の非を覺つたかに見える。然し至日本人が本當に腹の底から覺醒し日本が世界の中心たる事を判然意識してゐるだらうか。覺醒させ、意識させるのが學者の一大きな責務である。かの滿洲事變が世界新秩序建設への最初の巨歩であ

り、支那事變亦、實は、現状維持的歐米勢力に對する反擊であり、それ等が獨、伊の急激な擡頭を促し、第二次歐洲大戰を勃發せしめた現實は、かつて黄金の島として日本が、マルコポーロに深き憧憬の念を生ぜしめ、それがやがて、コロンブス、ヴァスコ・ダガマをして夫々の業績を擧げしめ、近世世界史の扉を開かしめるに至つた現實と共に、日本が世界の根軸たる所以を證するものなりとは既に論じ盡された所であるが、それと共に日本の餘く、重き使命達成の基礎となり、眞に日本人を覺醒さすべき、日本國土の地理的優秀性・冠絶性が新しく明にせられねばならない。而も之こそ萬邦をしてその所を得せしめるべき、「日本本來の地理學の最初の任務」ではなからうか、之を明示してゐるのが本書である。

今や日本人自らの手に依つて世界史の轉換、進展が着々と行はれてゐる。然し思へば久しい亞細亞の屈辱ではあつた。多くの亞細亞民族の住む所、其處は從來歐米舊秩序諸勢力に依つて植民地化せられた。彼等の國土、資源は悉く掠奪、擄取せられ、彼等の一切の力と傳統と文化は根柢より破壊し盡され、遂にその民族は死滅すら強制せられたのであつた。然り、彼等を歐米舊秩序諸勢力の壓迫、桎梏より解放し、あらゆる土地の可能性、或は潛勢力を正しく開顯利用し、正しき歴史を創造することこそ日本に課せられた天の使命ではなかつたか。かくして大東亞戰爭は勃發すべくして勃發したのである。而してかかる日本の尊く大なる使命達成の爲には、現状が認識され、欺瞞と矛盾が剔抉打破せられ

皇國日本の道徳的實踐、皇道世界宣布、將來の創造に對する嚮導的指針が與へられねばならぬ。而してこの事こそ萬民をして正しい生を遂げしめ、天業の恢弘に翼賛し奉るべき「日本本來の地理學の任務」ではなからうか。之を明示し、「現代神話の八咫鳥」の役割を果してゐるのが本書である。

私は本書を二度、三度読み返す度に深い感銘を受けた事を告白すると共に「英國は滅亡す」の篇の如く軽い隨筆風の中に深い示唆を與へるものすらあつて、著者の熱ある文章は一氣に讀者を卷末迄引張つて行くであらう事を確信し、前著「日本地政學と共に廣く熟讀されん事を望んで此の紹介を終り度い。(B6判・二二三頁・十七年十二月・白楊社發行・定價貳圓) (岡本信太郎)

改訂 日本地理學史 藤田元春著
増補 日本地理學史 鮎澤信太郎著

鎖國時代の世界地理學 鮎澤信太郎著
大日本海——日本地理學—— 同 著
史の研究

地理學の歴史は、單にいふところの科學史としてのみ取扱はるべきものではないであらう。それはわれわれの土地への自覺そのものに、より多くの關はりをもつからである。地理學的世界像は地表に關する精密な知識に於いてよりも、その精密化を促がした地盤の上にこそ成立してゐるといふことができる。いふならば地理學の發展は國土と世界との反省の歴史であり、精神史に於けるひとつの事實として考へらるべきものをもつとせられるであら

う。その意味に於いて、大いなる戦ひのもと、國家への思念と世界への意識が限りなく昂まりつゝある今日、わが國の地理學史に關する研究が深い期待を以て俟たるべきことは多言を要しない。最近相踵いで刊行された上記の三著を紹介し得ることは、それ故に同學のわれわれの悦びたるのみではないのである。

藤田教授の「日本地理學史」は早く昭和七年に上梓せられて、今ではこの分野に於ける「古典」となつてゐる。しかし斯界の陳腐たるもの、避け難い誤謬が白玉の瑕瑾となつてゐたことも事實であつた。今回著者はこれに嚴密な改訂を施し、更にその後の研鑽に成る佐藤政義の地圖その他四篇を加へて再刻せられた。日本地理學史を一應骨格づけたこの歴史的な著書の新しい門出を、老來益々盛な著者の爲にもお悦びしたい心である。

鮎澤學士之二著は、「東洋地理思想史研究」以來倦むことなき著者の精進の結晶である。「鎖國時代の世界地理學」は西川如見、林子平、三浦梅園、司馬江漢、森島中良、高橋景保、齋藤拙堂、渡邊華山、吉田松陰、武田簡吾の諸家の地理學的業績を紹介し、なほ譯司松村元綱の「和蘭航海略記」が附載せられてゐる。それぞれ獨立した論文であるが、通讀して暮末期のわが世界知識の概要を知り得るであらうし、幾多の新資料の紹介、舊説の是正がそれを一層貴重なものとしてゐる。同じ著者の「大日本海」は、いはゞより軽い意味で執筆された論文を集録されたもので、書名に取られた大日本海と題する論文では太平洋を大日本海と呼んだ古地圖を考證され、その稱呼を再び採用すべきことを提唱されて要路者の